

蘭風

March 2025 vol.305

少女たちの
夢が育つ
新しい居場所

特集

バングラデシュに新たな支援センター開設！



SHAPLANEER

プロジェクト 最新情報

シャプラニールは、1972年に設立された南アジアと日本で貧困問題の解決に向けて活動する国際協力NGOです。「すべての人々が持つ豊かな可能性が開花する社会」の実現をめざし、児童労働の削減、災害に強い地域づくり、フェアトレードへの取り組み、多文化共生社会づくりの推進を行っています。

※情報は2024年12月時点

1 学校、地方行政、地域の力で 児童労働の予防と削減 児童労働

児童労働に陥る子どもを減らすために教育現場の改善に着手。子どもたちが学校へ通いたくなる環境づくりの指針と、学校、教師、保護者、生徒、地域住民が取るべき行動を記した「学校児童保護方針」を策定（写真：策定記念行事の様子）。事業対象地域の全世帯調査を実施。今回明らかとなった子どもや教育状況などは今後の個別の家庭支援に役立てる。



2 水害に強い コミュニティづくり 防災

避難訓練やインフラ整備など日頃からの減災防災で命を守る活動。生徒、教師と一緒に考えた学校内の水害発生時の避難路などを反映させた安全計画と学校内のリスクマップを作成。当初、校舎の危険個所が明らかになることに学校は難を示したが、最終的には安全対策として取り組みを進めることに賛同してくれた。



多文化共生

多文化共生社会づくり

在住外国人と地域住民がつながる多文化共生コミュニティスペース「マザリナ」を運営。運営ボランティア研修として、多様な外国ルーツの人が集まる大久保在住のライター室橋裕和さんと街歩きを実施（写真右）。レストラン前を毎日清掃するネパール人といった、地域に根付いた在住外国人の暮らしを知ることができた。



1 家事使用人として働く 少女支援（⇒P4-6） 児童労働

少女のための支援センターをダッカ市で運営しながら、児童労働撲滅をめざすNGOら21団体と結成したプラットフォーム（写真右）で政策提言を実施。今後はバングラデシュ政府の2030年までに児童労働撲滅という目標を実現するため、議員への働きかけや世論喚起を強化していく。



2 ジェンダー視点による 地域防災力の強化 防災

サイクロン常襲地帯で女性・少女に配慮した避難計画策定やインフラ整備を行っている。平時の井戸水の塩害問題、さらには洪水時の井戸の浸水が原因で女性は遠方への水汲みの負担が増えるため、雨水タンクを設置。女性が雨水タンクや井戸の維持管理ができるよう支援し、女性も防災の担い手となる地域全体の防災力向上をめざす。



2 クルナ県コイラ郡 2024年～ 1 ダッカ市内 2006年～ 3 フェニ県 緊急救援活動（⇒P10） Bangladesh

フェアトレードへの取り組み「クラフトリンク」

バングラデシュ、ネパールで身近にある素材や暮らしに息づく伝統文化を大切に物づくりを通じ、生産者の生活向上をめざす取り組み。SNSで話題となり大人気となっているフェルトマスコットのイエティの関連アイテムを発売中。お問い合わせの多いノクシカタ刺しゅうや石けんは、パートナー団体と再販に向けた準備を進めている。



INDEX

- P2 プロジェクト最新情報
- P4 **特集**
バングラデシュに新たな支援センター開設！
- P5 インタビュー
自分の時間をもてることが嬉しい
- P6 社会に届け！子どもの権利キャンペーン
- P7 **クラフトリンク**
- P8 **理事・評議員からのメッセージ**
人が移動する時代における日本の多文化共生
評議員 新居 みどり
- P9 **シャプラバ！**
白百合学園小学校 教員 高橋 絵理さん
シャプラ文化部
ウォールアートにこめた願い
- P10 バングラデシュ東部大洪水
緊急救援活動報告
- P11 **シャプラ掲示板・事務局だより**

シャプラニールとは

「取り残さない、その小さな声を。」

戦争や大規模な自然災害など、多くの人々を苦しめる事件の裏で日々の暮らしそのものに困難を抱えている人がいます。

そういった声なき声をすくい上げ、一緒に感じ、考え、行動し少しでも明日に希望が持てるよう、ともに歩いていくこと。

それがシャプラニールの考える「誰も取り残さない」という精神です。

南の風 通巻305号（季刊）

2025年3月発行

発行人 坂口和隆
発行 認定NPO法人シャプラニール
＝市民による海外協力の会
編集長 藤岡恵美子
編集 勝井裕美・高階悠輔・長瀬桃子
デザイン 柴田篤元
印刷 株式会社上毛印刷



ミナさん（仮名、11歳）

センターに通う少女たちと
（前列右端）

自分の時間をもてることが嬉しい

私 は南部のポリシャル出身です。今は家族と離れ、1人でダッカの雇い主の家で働いています。お母さんが家を出て行ってしまったので、お父さんと3人の弟がいますが、家を支えるために長女の私が働きに出ることになりました。私は8歳でした。

はじめは雇い主から「赤ちゃんのお世話をするだけの仕事だよ」と言われていたけど、いざ仕事が始まると料理や掃除、洗濯など家事全般を任されてしまいました。毎日、朝6時に起きて夜11時半まで働かないといけません。

学校に通って勉強したり、落ち着いて過せる時間は、雇い主の家ではもらえませんが、でもセンターでは2時間だけど、自分の時間があります。先生と一緒に絵を描いたり、歌を歌ったり、友達と遊んだりできるから、とても楽しいです。

この活動をもっと知りたい方へ

シャプラニールのウェブサイトをご覧ください。



https://www.shaplaneer.org/support/domestic_worker/

「子どもの夢基金」で応援しませんか

1日100円（年間36,500円）を一口とした本基金は、バングラデシュの家事使用人として働く少女や、ネパールの子どものために勉強が続けられるための教育環境整備などを通じ、働く子どもを生み出さないような社会を変えていく活動に役立てています。年1回、活動の報告書をお届けします。詳細は下記のウェブサイトをご覧ください。

シャプラニール 子どもの夢基金

検索

<https://www.shaplaneer.org/youcan/donate/now/>



特集

新たな支援センター開設！

シャプラニールは、2006年よりバングラデシュで家事使用人として働く少女への支援活動、そして児童労働のない社会をめざした働きかけを続けています。2024年には少女たちの学びの場となり、安心して過ごせる新たな支援センターを開設しました。

家事使用人として働く少女支援

バングラデシュ

支援センターで先生（右）と楽しく会話する少女たち

2024年夏、首都ダッカ市内の2カ所に支援センター（※）を新設しました。センター運営は、バングラデシュのパートナーNGOのASD (Action for Social Development) が担っています。

センターはバイクバラ地区とアジンプール地区の公務員住宅エリアにあります。公務員はバングラデシュの中でも安定した仕事のひとつ。中流以上の生活をしている世帯が中心で、住み込みで料理や洗濯などを担う「家事使用人」を雇うことが日本よりも一般的で、少女を雇用している家庭も多いといわれています。

12月現在では約30名の少女がセンターに通っており、年齢は9歳から17歳です。少女のほとんどは地方からダッカに移り住んできており、出身地は南部のボラ島やポリシャル、北部のマイメンシン、東部のノアカリなど。センターに通い始めて、初めて同世代の友達ができたとする少女もいます。センターでの授業は午後3時から5時までの2時間。例えば、自

分の名前と住所をベンガル語で書く授業では、「住所が必要になるのはどんなとき？」という先生からの問いかけに対して、「学校に入るとき」「迷子になったとき」「契約をするとき」と少女たちは具体的な答えをあげています。自分の文字で名前や住所を書くことも、大切な自己決定の一つ。この先の将来においても、自分で物事を決められることに繋がっていきます。

本来アジンプール地区のセンターは、公務員向けの集合住宅内の自治会の建物で開設すべく準備をしていましたが、8月の政変の影響を受け公務員の立場もゆらいでおり、雇い主も外とのかかわりに慎重になっています。それでも自治会や学校との繋がりを徐々に強め、地域全体で少女たちを支え、子どもの権利についての理解を広げるべく活動を続けていきます。2025年度は少女たちの送り出し元となっている農村部での調査を行い、都市部のみではなく送り出し地域での働きかけに向けた取り組みも進めていきます。

※支援センター：働く少女に読み書き・計算の教育や技術研修、レクリエーション等を行っている。

シャプラニールのフェアトレード活動は1974年、独立後のバングラデシュで手工芸品をつくり日本で販売することに始まりました。それ以降はネパールでも活動を開始し、生産者の生活向上、特に社会的に弱い立場にある女性たちの自信や尊厳を取り戻すことをめざした活動を続け、2024年に50年を迎えました。

この50年、活動地の状況や日本の消費社会を取り巻く環境は大きく変化しています。クラフトリンクは、これからも時代に向き合い、南アジアの人々に寄り添いながらこの活動を続けていきます。

今号では、この節目の年を記念して、活動の創成に尽力された吉田ユリノさんのメッセージをご紹介します。



シャプラニールの
フェアトレード活動の創始者
吉田ユリノさん

フェアトレード活動、50周年の意味

初めての現場ボイラ（※）で「この村で何が必要だろう」と考えた。大多数は零細か土地を持たない農民。当時是一日一食もやっという状況だった。その中でも女性はさらに厳しい立場にいた。

私は「もし自分が彼女だったら口惜しい」と強く感じた。彼女たちも自分の人生の主人公として、自尊心をもって生きたいと願っているに違いない。現金収入を得る仕事をつくろう。私を知る「現地の資源」を総動員した。安価で入手でき、民具として馴染みのあるジュートを材料として、読み書きができなくてもできる仕事で、訓練を依頼できる場を利用して、皆で生活を良くするために協同で運営する、という活動を始めた。

私たちの活動は自立を支え、心が通じ合う営みになっている。このことを今祝いたい。

※ダッカから車で西へ2時間半に位置する、マニックゴンジ県ギオール郡にある、シャプラニールが初めて活動を始めた村。

ジュート素材の商品や大人気の新作アイテムは「クラフトリンク オンライン ショップ」からご覧ください。

<https://craftlink.shop/>



1.活動を始める頃の吉田さん
2.ジュート製の民具を編む様子
3.大人気のジュートサンダルをつくる工房の様子
4.シスター・リリアン（写真左、右は小川職員）。
主文中の「訓練を依頼できる場」を提供してくれた



家事使用人として働く少女の権利保護について呼びかける生徒たち



社会に届け！ 子どもの権利 キャンペーン

子どもたち自身も声をあげよう！

特別授業では、まずはじめに、みんなで子どもの権利についてのスローガンを書いたバナーを持って、学校近くの路上で呼びかけを行いました。「私たちにも権利が必要だ！」「教育にイエスを！」「バングラデシュの未来をつくるのは私たち！」と合せて声を上げます。男子生徒の一人は「こんな風に声を上げるのは初めてだったけど、自分にもできた」と、はにかみながらも自信を持って話してくれました。

Message



バングラデシュの人口の多くは子ども・若者世代が占めます。家事使用人として働く少女らと同じ世代でもある彼ら自身が児童労働に対して声を上げ、次の児童労働を生まない土壌をつくることも、社会に変化を促すための大切な取り組みの一つです。

東京事務所 高階 悠輔



子どもの権利について学ぶ授業の様子



呼びかけるメッセージを考える生徒たち

「子どもの権利について周囲の人に伝えたい」「子どもにだって働きかけできるよね」と、自らできるアクションをきちんと考えているようすが印象的でした。

こうした取り組みを通じて、児童労働に対して将来にわたり「ノー」と声を上げることができ存在を増やすため、学校や地域への働きかけを続けていきたいと思います。